村上雅孝（むらかみ まさたか）

学位の種類　博士（文学）

学位記番号　文第80号

学位授与年月日　平成5年5月13日

学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当

学位論文題目　近世初期における訓読の国語学的研究

論文審査委員　（主査）
教授加藤正信　教授中村完
教授鈴木則郎

論文内容の要旨

目次

序章　はじめに
1　本論文の執筆意図
2　従来の研究
3　近世の訓読に関する従来の研究
4　近世における訓読の流れ
1章　文之玄昌の研究
1　桂庵玄樹の訓読観
2　文之玄昌と「周易伝義大全」
3　文之玄昌と「周易句解」
4　論語元亀四年点と文之点
2章　藤原惺窩の研究
1　藤原惺窩点の資料について
2　藤原惺窩と古点
3　藤原惺窩と林羅山の訓読観

3章　林羅山の研究

1　林羅山と手沢本「正平版論語」をめぐって

2　林羅山訓点「毛詩注疏」の和訓とその意義

3　寛永版古注点の性格とその意義

4　道春点の形成過程とその成立

4章　林羅山と鵞峰――羅山学の発展――

1　林鵞峰と「詩経正文」および「詩訓異同」

2　林鵞峰の「公羊伝・穀梁伝」刊行をめぐって

3　林鵞峰と「周易訓点異同」

4　鵞峰点「易経本義」の意義

5章　近世初期における訓読語の性格

1　近世初期における訓読語の一性格

2　近世初期における伝文の体の訓読と「ゾ」

終章　おわりに

序　　章

序章の1節では、本論文の執筆意図をのべた。本論文の題名の意味するところを個別的に説明し、併せて執筆意図を述べたのである。本来は、近世全体の訓読史を叙述すべきであるが、そのうち、近世初期に限定し、その時期を代表する人として、文之玄昌、藤原惺窩、林羅山、を取り上げたのである。近世初期に、文之を入れることには異論があるであろうが、これは、1節で述べたように、近世初期を、三者の生涯の実質的活躍時期ばかりでなく、文化史的にも広い意味にとっているからである。また、文之点というものが、寛永初年に刊行されたという意味もある。この文之と藤原惺窩は、解釈によっては、室町時代に入るということもできるので、特に、中世と近世との接点ということにも意を用いて記述した。

本研究は、訓読を対象とするので、従来の訓点語学という分野で記述されるべきであると考えられるが、研究の方向としては、漢字学という領域でとらえられるべきである。その内容は、主として、学史的研究になりうるものであることを述べた。国語学史ということになる。これは、従来漢字の立場から漢字学史という領域の問題として考えられていたのである。

また、室町時代以降、宋学の展開に伴う訓読の問題は、国語学の立場で捉えられることは少なく、近世も含めて未開拓の状態にあるということも執筆意図の重要な部分を占める。

中世に朱子学が入ってきて、従来の漢唐訓詁学に代わって学問の世界を支配するように思われたが、現実は、折衷、あるいは両者並立の状態であった。それが古典解釈の基礎である訓読の世界にも明確に看取できるのである。こうした趨勢は、そのまま近世へ流れ込んだように思われる。文之は、五山禅林世界から、惺窩、羅山は、博士家の世界からともに大きな影響力を受けてはいるが、

前者は、程朱学を拠り所としながら漢唐訓詁学を参考にし、後二者は、朱子学を標榜しながらも漢唐訓詁学に基礎を置いていた。

文之に関していえば、従来言われるような地方的位置づけではなく、五山禅林衰退後、宋学の正当を受け継いだものとして評価が与えられるべきであろう。五山の儒仏一致の風潮はいっそう禅僧を儒学へと駆り立てたが、中には、儒僧と言われるものもでてきた。その儒学の内実はどんなものであったか、それを、その基礎学である訓読の世界でみることができるのではないかと考えてみた。桂庵の例にみられるごとく思想の学である宋学は、言語の世界へも広がりを見せ、次第に変容する相を見せてくる。その最後の灯を掻きたてて、その世界に光をあてようとしたのが文之である。

かくして、宋学の世界へ分け入るべき手段としての訓読という場には、宋学的な層と訓詁的な層が見られるということになる。これは、歴史学などで指摘されていることの日本朱子学の特殊性と結びつくものと考えられる。そのような意味で、近世初期を、前の室町時代と関連させて説く必要があるのである。室町時代の禅林の学問は集大成的、百科全書的であることが指摘されているが、寛永文化の啓蒙性、総合性の特徴と連続性があるものと考えられる。その集大成的性格や総合的性格は、宋学（朱子学）のもつ二重構造と深く結びついているものと思われるからである。

上の観点も含めて、文之の新注学が、江戸時代の朱子学を興隆させる原動力になったといっても、結局は訓読という訓詁的な側面を残すのみに終わってしまったこと、惺窩や羅山の朱子学の基盤は漢唐で訓詁学であったことの意味を考えてみようとしたのである。

以上、文之、惺窩、羅山という近世の儒学の幕開けをはたした人々の学問の基礎となる訓読の世界を、学史的に、古典解釈学的に、言語文化史の上から捉えようと意図したのである。

序章の２節では、明治以降の訓読語学史を単行本を中心に概観した。明治以降に限ったのはいわゆる訓点の研究は明治の末年に始まっているからである。その結果、本論文の目指すテーマは戦前において漢学の世界で行われていることが判明した。国語学の世界では近世の訓読のみを扱った単行本は一冊もないということがわかったのである。

続く３節では、近世における訓読の研究を論文にまで広げて概観した。それによれば、このテーマに関する研究は、昭和50年度あたりから増え始め、60年代、平成にはいってというように、年々増加の傾向がみられ、それらは多く国語学研究者によって行われていることが明らかとなった。

４節では、近世における訓読の流れを概観した。それによって、本論文の問題点、位置付けが明らかになると考えられたからである。とりわけ、初期と後期とでは傾向がかなり異なることがわかった。

１　　章

１章の１節では、桂庵玄樹の訓読観について述べた。桂庵はいわゆる薩南学派の開祖で、文之もこの学派に属している。文之は、桂庵の理念の忠実な実践者であることから、文之の訓読観は、桂庵のそれに基づいていると思われるのである。また、桂庵は東山時代における五山儒学の代表者と

いわれていることから、五山儒学の内実が桂庵に集約されているのではないかと考えたのである。文之も、単に、薩南学という一地方の儒僧ではなく、五山儒学の正統につらなるものとして考えた時、五山儒学は文之によって幕を閉じられたとみることができよう。桂庵の「桂庵和尚家法倭点」を資料に、桂庵から文之への流れを見ようとしたのである。その結果、五山禅林の宋学には、思想的と言語的な面があり、この桂庵の著作は、禅僧達が、言語的な面に傾斜していく過程で生み出されたものと考えた。例えば、桂庵の言う「新注」は、注釈の他に、訓読法という言語の意味もあったからである。

桂庵のこの資料は未完成のものであり、言語に対しても通時的視点を欠いたものであった。多くは後継者に託されたものであったのである。その後継者こそ文之玄昌であり、文之が桂庵の理想を実践に移したのである。文之が結局、宋学という思想の学ではなく、文之点という訓読法、つまり言語の面を残すのみに終わってしまったのは、桂庵、もっと広く言えば、儒仏一致の思潮の中で、五山禅林がたどりついた世界の延長に、その理由を考えることができるのである。

2節では、文之と資料論で、「周易伝義大全」を取り上げた。文之関係資料としては、従来「論語」が主資料として問題にされてきた。これら四書はいずれも近世の版本である。

本論文では、江戸時代以降文之自筆とみなされてきた「周易伝義大全」を取り上げた。この資料は、近世以来その存在が指摘されながら、何故かその後埋もれてしまっていたものである。これが、宮内庁書陵部に現存することを指摘した。また、この資料は、文之の識語の内容、また、筆跡等から文之自筆というより、弟子である正円の筆の可能性があり、結局、原本の副本であったという考え方もできるという示唆をした。また、この資料には、文之の書き入れがあり、この書き入れは、文之の経学の背景を知るに極めて有用なものであることを指摘した。いわゆる程朱学の実態が、この書き入れにより判明したのである。また、訓読の背景となった原注釈の明記により、その基盤が明確となった。さらに、古点に対する姿勢も明らかになったのである。

3節では、「周易伝義大全」の書き入れに見られる「周易句解」を問題にした。

「周易句解」は、五山禅林において易学の参考書として利用されたものである。内閣文庫に現存する同名の書は、元刊本であるが、文之の手沢本であった可能性を指摘した。本書の利用は、文之が五山禅林の流れにあることの証とも考えられる。

4節では、桂庵点によっていると言われている「元亀四年点論語」と文之点とを比較した。その結果、両者、ともに清原家点に影響を受けているが、どちらかと言えば、元亀本のほうがその傾向が顕著である。桂庵のルールは文之にもほぼ継承されていると言えるが、そのほかの面ではかなりゆれがあったようである。文之は桂庵の法則を改訂したと言われているが、むしろ足りないところを補ったりして体系化に努めたと解釈すべきかもしれない。文之は、いわば桂庵の理想を現実化した人と捉えるべきであろうと思われる。

2　　章

この章では、藤原惺窩について考察した。1節では、従来確かなものがないとされている惺窩点資料について検討した。近年、現れた惺窩旧蔵本を資料に寛永版本の伝惺窩点と比較検討したのである。その結果、旧蔵本、すなわち慶長版は、寛永版と共通するところが多いということが判明した。一方、この内の「春秋」については、寛永版と異なる所が多く両者の結びつきは薄いのではないかと思われる。つまり、「詩経」のみが関係が深いことになる。

この慶長版は版本であって筆写本ではない。よってこれまで言われている、かの姜沆等が筆写した原本ではない、とおもわれる。この慶長版は、その原本に最も近いものであろう。また、この慶長版には無訓のところもある。このことから、惺窩の訓点完成は、慶長4年より下るものであろう。

一方、寛永版は、音読型と訓読型の和訓が混在している。音読型は慶長版にほぼ一致する。このことから、寛永版には祖本があり、安田安昌は、二種の祖本を組み合わせ出版したものであろう。羅山跋によりその訓はほぼ惺窩訓と言われているが、慶長版の存在によりその証明がなされたことになる。その後、承応・寛文年間に、惺窩点とおぼしき五経が出版された。「詩経」は慶長版に、「春秋」は、寛永版に訓が極似する。このことは、上の寛永版に祖本があったことを裏付けるものである。惺窩点に、音読型、訓読型があることは、段階的発展と考えることもできるが、一般に、訓読にはこうした二つのタイプがあったことを予想させるものである。

2節では、藤原惺窩と博士家の関係について考察した。

惺窩と博士家の関係は連続する面があることが判明した。惺窩は宋儒の学を標榜する一方、漢儒の学の必要性も認識していた。それは五山儒学に触発された面もある。古注学と新注学は、対立する面はあるが、一面では相補関係にあるからでもある。古注学を基礎にしてこそ新注学の展開はありうるとみていたのである。惺窩の場合、新注学のテキストは四書大全、五経大全であったが、古注学のそれは十三経注疏であると考えられていたようである。そのテキストにしても清原家の用いない経書を読むという新しさがあった。

惺窩の和訓には古点に基づくものがあると言う羅山の指摘は事実である。その訓は清原家点と考えることができる。清原家の和訓の性格は惺窩の理想に合致するものであったこと、惺窩自身、絶えず清家の影響下にあったことによるものと考えることができる。

3節では藤原惺窩と林羅山の訓読観について考察し、惺窩から羅山への流れを見ようとした。

実質的な意味で近世訓読の基調は文之点と道春点であった。惺窩点は幻の点と言うところがある。その羅山の点は、師の惺窩から多くの教えを受けたものであり、師の理念を引き継いだものであることを実証した。「東見記」は、その意味で、彼らの訓読観を伝える貴重な資料の一つであるといえよう。彼らの理想は尚古ということであり、歌書草紙の言葉を取り入れたり、「イナカ点」を避けるということであった。その点で博士点は彼らの理念に合うものであったのである。両者の訓読を比較対照することにより、両者の近似性を実証し、上の理念を裏付けた。

3　　章

1節では、羅山愛蔵の「正平版論語」が、彼の経学の出発点であったことを指摘した。その上で、本書が、後年、古注学の基礎となった「十三経注疏」に結びつくものであることを述べた。そのように考えると、朱子学の推進者である羅山には古注学が厳然として存在していたことが分かるのである。「正平版論語」は、彼の古注学研究の原点ではなかったかと思う。

これを、羅山は、自分の後継者と目した春信になぜ与えたのか、この書をめぐる問題点を指摘した。羅山の経学の方針はまず漢唐訓詁学を学び、それから朱子学に取り組めということであった。これは羅山の歩んできた道であり、本書は、その意味で、この方針の象徴的存在であった。また、博士家の和訓は、優艶であり、その方法を学べということであった。本論文は、さらに本書をめぐって、林鵞峰、春信の事柄を「国史館日録」を資料に述べた。以上、本書に関して、羅山との関係、羅山と羅山学、ひいては林家学、この本と林家をめぐる事柄についても述べた。

2節では、羅山の手沢本「毛詩注疏」の和訓について考察した。「毛詩注疏」は、「十三経注疏」の一つであり、いわば古注学の集大成である。

「毛詩注疏」の和訓は、清原家点によっているところがある。しかし、それを全面的に取り入れているのではなくて、自らの方針で取捨選択しているところもある。この「毛詩注疏」の例から考えると、「十三経注疏」の和訓は、のちに成立する道春点の前段階を示すものであり、古点の要素に自らの案を加えた、羅山の古注点であったと考えることができる。

羅山にとって、「十三経注疏」の訓点、校勘作業は、自らの古注学研究の総決算であった。この作業は、後に鵞峰も参加しているので、林家をあげての古注学研究であった。

この「毛詩注疏」の和訓は、道春点「詩経」に流れ込んでいる。これと新注学研究の成果をあわせて道春点が成立したものに違いない。このように、新注に基づいた道春点の和訓は、内側に漢唐訓詁学を含むものであり、これが、さきに述べた羅山の経学の方針の実践であったといえよう。

3節では、寛永年間に刊行された「周易」古注点について考察した。従来、本資料については書誌学者により古活字版を覆刻したものであること、古点の俤を存することの二点が指摘されている。

上の問題点について、まず古活字版をそのまま覆刻したものではないことを指摘した。また、古点の俤があると見えるのは、博士家点から直接とられたものでないことを述べた。本資料は、羅山点「十三経注疏」のうちの「周易注疏」の一部から間接的に写し取ったものであり、古点の俤が存するのは、羅山点が清原家点より影響を受けているためであろうと思われる。さらに、朱子学普及の時代に、何故、この資料が刊行されたのかということが問題になる。それは、当時の儒学の趨勢と関係があり、近世初期の朱子学が漢唐訓詁学をいわば基盤として成立したことと関係がある。これは、惺窩や羅山の経学、また文之すらも漢唐訓詁学を必要としたことを思い起こすべきであろう。

4節では、1、2、3節をふまえて、道春点の形成過程とその成立について考察した。この場合、道春点は羅山の点という意味で使う。

まず、道春点を古点の世界と新点の世界に分けて、その成立を二つの世界の重なった、つまり重

層的なものと考えた。羅山にとって、官家古点は必ずしも保守的なものではなかったようである。清原家の家学に存在する革新的な傾向を十分に取り入れたものであった。羅山にとって、官家古点は清原家ばかりではなく、「白氏文集」の例にみられるように、他の博士家を含むものであったことは言うまでもない。それが羅山の言う「官家古点」であった。

羅山は、師惺窩からも古注学について学ぶところがあった。「十三経注疏」の研究は惺窩の教えによる。また、古点の優艶な特色を尊重すべきことも惺窩の教えであった。それ故、古点的要素は、惺窩を通しての摂取ということも考えてよいであろう。惺窩の和訓は歌書草紙からもとられたであろうと思われるが、この点でも羅山は多くの教えを受けたようである。事実、羅山の和訓には、惺窩の影響が認められる。羅山の古点受容は、正平版の「論語集解」に始まり、晩年の「十三経注疏」で終わっている。これは、羅山における朱子学の側面を象徴するものであり、新点の世界と表裏の関係にあることを意味している。

羅山の新点の世界は、慶長年間の新注の講説に始まる。しかし、四書五経の訓点が完成したのは、それよりかなり遅れてのことであった。その訓点は、最初は私的なもので、清原家点や惺窩点を柱としながら新点を創造していった。寛永頃の「詩経正文」はいまだ旧点の趣が濃いものであるが、承応頃の「詩経大全」にはそれを脱しようとする姿勢を見ることができるのである。

4　　章

本章では、林羅山とその子鵞峰について考察した。二代目鵞峰によって羅山学が確立したものと思われる。鵞峰が、父の学問をどのように受け継ぎ、それをどのように発展させていったのか、また、独自性を発揮し、いわゆる林家の学問というものを築いたかを見ようとした。

1節では、「詩経正文」と「詩訓異同」について考察した。「詩経正文」は、鵞峰が、父羅山について、その句読を学び、訓点を書き入れた本である。いわば師資相承の形をとっている。「詩訓異同」は、鵞峰が、林家に学ぶ門弟のために、「詩経」の原注釈の違いを訓読の形で示したものである。こうした教授法は、羅山や林家ばかりでなく、文之の例にみられるように、経書解釈の一般的方法であったと見られる。また、この「詩訓異同」によって、「詩経」の和訓を調べれば、経学の傾向、すなわち、古注による解釈や新注による解釈などの傾向を知ることができる。

ここでは、「詩経正文」の和訓を、「詩訓異同」の示すところによって、古注によるもの、古注・新注の両方（注の継承を含む）によるもの、新注によるものに分け、その傾向を見た。その結果、その和訓は朱伝に基づくものが多いということがわかった。「詩経」の和訓が朱伝によることは当然のことであるが、古点の要素が、それでも見られるのは注意しなければならない。

2節では、鵞峰と「公羊伝・穀梁伝」について考察した。この二書は、寛文8年、林鵞峰によって刊行された、羅山訓点「新刊公穀白文」のことである。この刊行の事情を、「国史館日録」によって明らかにした。それによれば、この二書は、林家の最重要本である「十三経注疏」を元にしていることが判明した。林家における「公羊」「穀梁」の研究は、遡れば、藤原惺窩に由来するもので

あり、博士家の用いないこの二書を研究しようとしたところに、近世儒学の新しさを見ることができる。羅山の業績には、文献的な仕事があり、この「十三経注疏」の校勘は、その代表的な例である。鵞峰は、その領域を受け継ぎ発展させようとしたのである。

3節では惺窩と「周易訓点異同」について考察した。「周易訓点異同」とは、「周易」の古注・新注様々な注釈のうち、両者対立の著しいものを集めたもので、それを訓読の形で示したものである。前の「詩訓異同」と同じもので、これも羅山の教授法の具体化と見ることができる。また、これは当時の経学の趨勢を反映していると見ることができる。朱子学が普及するにつれて、中国側の注釈の重要性が増し、講義や注釈書は、それらに基づいて述べたり書かれたりするようになったからである。羅山の経学は、原注釈博引の傾向が顕著であった。「四書大全」や「五経大全」により朱子学を理解しようとしたことにも原因がある。この注釈の理解は必ずしも容易ではなく、一種の手引き書を必要としたのである。

鵞峰の「周易」受容は、かなり専門的なもので、朱子の原注釈から理解しようとした。この点、惺窩や羅山より一歩進んだ姿勢を見ることができる。鵞峰には、「周易」に関する多くの著作があり、その成果は「周易訓点異同」にも反映しているようである。鵞峰の「周易」受容は、山崎闇斎に近いもので、学問の深化の様子がうかがわれる。

鵞峰の受け入れた原注釈の範囲は、新注のみならず、古注も含むものであった。これは、古注学から新注学へ転換した当時の経学の実態を示すものといえよう。

4節は、林鵞峰が訓点を加えた「易経本義」について考察した。この資料を通して、鵞峰の、羅山学を継承している面とそれを発展させた面を見ようとした。

林羅山は、「大全」朱子学の典型的な実践者であった。鵞峰は、この「大全」主義を退け、原点によるべきことを主張した。これは、朱子学の純粋化ということであり、山崎闇斎に一歩近づいたものとして注目される。また、当時、崎門派から非難されるばかりであった林家学の知られざる一面を示すものとして注目すべきである。

「易経」の訓点は、従来、惺窩点、道春点にみられるように、程朱の注釈並立による付訓が一般的であった。いわゆる宋学であり、朱子学ではなかった。それを、「本義」をテクストにすることにより朱義中心に統一した。朱子学の純粋化のあらわれとして注意される。

当時は、新注学の時代であったが、その新注は古注あっての新注であることを認識し、古注を尊重して、それに基づいて付訓しているところもある。その訓点も道春点色の強いものであるが、独自のところも見られ、簡潔になっているところがある。これは「白氏文集」の付訓にも見られるもので、当時の趨勢を反映しているものと思われる。

5　章

本章では、惺窩、羅山を主とし、それに文之も加えながら、和訓について考察した。その結果、彼らの訓読語には、二つの相異なる面があることが判明した。それは、古代語的性格と近代語的性

格の二つである。その意味で、この時代の訓読語は時代的な重層性を持っているということになる。

その古代語的性格は、近世初期の訓読語の場合、雅の世界と結びついているところに特色がある。惺窩や羅山の場合には、多分に美意識を伴うものであり、尚古主義に基づくものであったといえる。

近代語性格は、中世語的性格に置き換えることができる。近世初期の資料に、中世語的性格がみられるのは彼らの生きた時代を考えてみれば当然のことである。室町時代語の宝庫「日葡辞書」の成立が慶長9年であることを思えば、彼らは室町時代語を使っていたといってもよいであろう。この世界は、雅の世界に対し、俗の世界ということができる。

このようにして、近世初期の訓読体という文章は、古代語的性格と近代語的性格の二つの異なった性格からなるものであり、内部に雅の世界と俗の世界を持つものであったといえる。

2節では、近世初期における注釈文の文体について考察を試みた。「伝文の体」というのがそれである。

古来、訓読文において、注釈文の場合、「ゾ」によって、その注釈的態度を明確に示すことがあった。時代が下るにつれ、「ゾ」は「ナリ」と交替することになる。

近世初期においては、文之、惺窩、羅山の訓読において、「ゾ」がしばしば現れるのはその伝統的性格を受け継いでいるためであると見ることができる。これは直接的には中世的性格とみなすことができる。羅山の場合は、古いものには「ゾ」、新しいものには「ナリ」という変化がみられる。これは、文之、惺窩の二人と羅山がある程度時期を画するところがあると見ることができよう。中期になると、貝原益軒のように、「ゾ」は耳遠いものになり、注釈文体の徴標とはみなされなくなってしまうのである。ここにも、近世初期訓読文の独自性があると考えられる。

以上、近世初期の新注に基づいた漢籍の訓読は、文之によって始められ、惺窩がそれに続いたが、いずれも未完成に終わり、羅山によって総合的に完成されたとみなすことができる。

論文審査結果の要旨

本論文は、中世末を含む近世初期の訓読について、まず五山禅林の系統である文之玄昌、次に藤原惺窩、そして林羅山およびその子の鵞峰という一連の儒者の訓読の世界を、広い文化史的視野と、綿密な書誌学的・語学的考証によって解明し、位置づけたものである。論者は、これを時代順に上記儒者ごとに、新資料を用いて実証的に跡づけ、その展開と成立の様相を明らかにした。

論者は、まず、「序章」で、中世五山禅林の儒仏一致の風潮における儒僧の訓読の流れにおいて、最初に出た文之の新注によるテクストが近世の朱子学を興隆させたものの、それは訓読、つまり訓詁的な面を残すのみに終わってしまったことの背景を解明しようとし、また、惺窩・羅山の新注による訓読が、実は漢唐訓詁学を基盤としていることを述べようとする。この三者に流れる訓読の研究は、従来、漢学・漢字学の観点で論じられていたが、これを国語学史的に考察し、従来の訓点語

学とかなり異なるものであるという論者の立場がここで明らかにされている。

「一章　文之玄昌の研究」では、五山儒学の代表者桂庵玄樹の意義を考察し、五山儒学における宋学の変容を訓読の面から指摘し、その後継者たる文之が、宋学という思想の学よりも、訓読法という言語面を残すにとどまった背景を論証している。論者は、文之自筆本の副本と見られる「周易伝義大禅」を再発見し、その書き入れを通して文之の訓読の世界を分析した。内閣文庫本「周易句解」は文之の手沢本であったことを指摘し、彼が五山儒学の流れにあることを裏づけている。また、「元亀四年点論語」と文之点を比較して、桂庵点の未完成的な性格を指摘し、これを実質的に整理し体系化したのは文之であることを論じている。新注で訓点をつけた人物としては、文之が惺窩より早かったことを論者は実証し、近世朱子学の創始者としての位置の与えられるべきことを主張する。

「二章　藤原惺窩の研究」では、まず、惺窩について、訓読資料を検討し、慶長版「詩経」「春秋」を寛永版と比較し、資料的価値を論じた。その結果、慶長版は、惺窩のいわゆる原本につながるものであるとした。また、この慶長版によって寛永版の性格が明らかになった。次に、惺窩と博士家の関連について論じ、両者に連続的な面があることを論証し、博士家は清原家であることを指摘した。これは惺窩が古注学を基礎としてこそ新注学の展開があると考えていたことと関係がある。その和訓は古点を混えたものであるが、清原家点の影響が強く、それは惺窩の訓読観にかなうものであったためと論じている。

「三章　林羅山の研究」では、朱子学の推進者である羅山にとって、「正平版論語」が彼の古注学の原点であり、その古注学の基礎は「十三経注疏」であった。彼は、経学の方針は、まず漢唐訓詁学を学び、それから朱子学に取り組むべきとした。彼の「毛詩注疏」について、論者は綿密な調査と考察を行い、その訓読語の性格について論じ、その和訓は清原家の影響を受けているが独自のものも見られ、結局は古点に自らの案を加えた羅山の古注点であったとする。寛永年間に刊行された「周易」古注点も羅山の「周易注疏」点である可能性が強く、これも当時、朱子学の時代に漢唐訓詁学を必要としたことを物語っているとする。そして、彼が「道春点」と言われる訓読法を形成して行く過程について、論者はこれを古点と新点の二つの世界の重なったものと分析し、清原家点や惺窩点を柱として新点を創造して行ったことを論証している。

「四章　林羅山と鵞峰－羅山学の発展－」では、羅山の子鵞峰が父の学問を受け継ぎ発展させた様子を「詩経正文」、「詩訓異同」、「公羊伝・穀梁伝」、「周易訓点異同」、「易経本義」における彼の訓点の調査・考察から述べている。ここに羅山学の継承と確立、および新しい展開を見ることができる。

「五章　近世初期における訓読語の性格」は、文之・惺窩・羅山の和訓の性格を検討し、上記儒者の訓読語には古代語的性格と近代語的性格の二つの相異なる面があるとし、それらが各々雅の世界と俗の世界に結びつくものであることを説いている。また、注釈文体において、文末に古くは「ゾ」が多用されていて、三者の訓読語にもこの語が多出しているものの、羅山に至り「ゾ」のみ

ならず「ナリ」も多用されているという調査結果も提出している。このことは、文之・惺窩に中世的な性格があるが、羅山は、前二者とは時代的に質的な差異のあることを実証している。そして、三者の訓読語の世界を通じて、時代的重層性と雅・俗の二面性が認められることを論者は指摘しているのである。

以上、本論文は、近世初期の訓読法の創始者から完成者に至る重要な時期の、主要な儒者における流れについて、多くの新資料を含む豊富な文献を駆使し、しかも厳密な書誌学的批判と周到な語学的解釈の基礎の上に、その解明を試みている。そのねらった時代と学者が正鵠を得ている点、資料の博捜と吟味の点、漢字と和訓についての識見・学力の点、いずれも高い水準のものである。

これによって、この時期の漢文訓読法の流れのある面が解明されたが、できれは、同時代の一般知識人の実情との有機的な関連ないし対比、また、これの近世後期への発展、さらに、明治以降現在に連なる漢文訓読法の確立等に関する社会的、国語史的展望についても本格的に触れてほしいところである。しかし、これは論者個人というより、学界自体に残された大きな課題であって、本論はその源流を解明したという大きな功績を有することは疑いない。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。